佐賀県立武雄高等学校
校長通信　NO.1　R5.04.06
TAKE OFF press
【校是】質実剛健　報恩感謝
文責　学校長　下村　昌弘
E-Mail　shimomura-masahiro@education.saga.jp

ＷＢＣを総括する！　-侍ジャパン世界一の裏に何があったのか-

World Baseball Classic において侍 Japan 世界一！　桜の開花が華やかなりし頃の朗報だった。

信じ続けた監督と個性に満ちた選手たちが、事前練習中に一丸となった。その結果としての世界一に日本中が歓喜した。意識の変化が短期間での結束を生み、彼らを頂点へと導いた。

彼らの一体感を醸成するアイコンとしての“ペッパーミル”。前向きで明るい雰囲気。でもがむしゃらな感じがひしひしと画面から伝わってきた。気負い過ぎず、とにかく楽しんでやる。オープンな雰囲気がそこにあったと思う。

私たち教師もそういう信頼関係に培う学校づくり、学級づくり、チーム作りに励み、たくさんの個性を秘めた発達途上の皆さんの前に立ちたいと思った。

緊張した場面ではおおむね本来の力を発揮できなくなるという。バスケットの神様、マイケルジョーダンでさえ、拮抗するゲームでの得点率は落ちていたそうだ。

しかし、そんなデータを打ち砕く時もある。それが“フロー状態”。ポジティブな心理学の言葉だ。まさに WBC での日本選手の活躍はこの状態ではなかったか。

大切なことに集中・没頭して自分の力を最大限発揮できる状態を“フロー状態”と言う。監督やコーチ、選手はもちろんだが、見ているもの全てがこの“フロー状態”に入っていたのではないだろうか。

少し前の話で恐縮だが、2007 年に“がばい旋風”で佐賀北高校野球部が夏の甲子園で全国制覇した時も、一戦一戦がフロー状態だった稀有な出来事だった。**（余談だがその佐賀北高校が最も恐れたライバルチームを鍛え上げたのが本校の内田努監督だ！）**

共通の目的をもって価値観を共有し、そのために自分に何ができるかを考えて行動する。これは私たちの日常生活でも言えることではないか。部活動にしろ、クラスのアクティビティにしろ、それぞれの志望は違えど、キャリア達成を果たすための勉学にせよ、自分が大切だと思うことを意識し、そのために今自分に何ができるかを考えて全力を尽くすことが大切だと改めて感じ入った。

一方、WBC では“爽やか旋風”を巻き起こしたチェコも話題になった。

チェコのスポーツと言えば、サッカーやナブラチロワを生んだテニスが有名。「かつての共産主義政治体制により、野球は西側、資本主義陣営の象徴とみなされていたためチェコには長い伝統はありません」。オフィシャルなチェコのチーム紹介文だ。

しかし、野球新興国ならではの情熱が彼らにはあった。純粋に一途に野球に取り組む学生のそれとでも言えばいのだろうか。選手のほとんどは消防士や電気技師など本業を持っている。

まさに二刀流。「二兎を追う者は一兎をも得ず」という諺（ことわざ）があるが、それも今は昔。「二兎ぐらい追わなくてどうする？」というのが今のトレンドだ。武高生の皆さんの中で、一兎も追ってない人は、、、まさかいないでしょうね！

令和５年度大学入試を振り返る

令和５年３月の卒業生もそれぞれが志す進路を見事に達成した。主な入試結果は以下のとおり。

京都大３名、東京工業大１名、大阪大１名、九州大６名、広島大７名、
佐賀大 25 名、熊本大５名、国立大医学科２名　など　　【国公立大 129 名】
早稲田大１名、慶応大１名、上智大１名、明治大３名、立命館大 12 名、
西南学院大 20 名、福岡大 67 名　など　　【私立大学 275 名】

さて、皆さんも耳にしているとおり、いま社会は急激に変化している。この変化への対応が遅れた組織から衰退する。経団連は 2019 年、既に「今後は終身雇用を続けるのは難しい」と言った。

こうした中、大学数は 1989 年から 2021 年の約 30 年の間に 289 校増え、一方 18 歳人口は 27 万人減少した。大学への進学率は約 30%増加。高校への進学率もほぼ 100%に近い。

つまり、高校や大学に入学したから何かが保証される時代ではなくなったということだ。これからを生きるには、正解至上主義に陥らず、間違えることを前提に、主体的に試し行動し、たくさん失敗しどんどん修正する力が必要になる。つまりは学び方とそのエンジンを鍛えなければならない。

そこで皆さんが大学を選ぶ際には、①自分はこれまで何に興味をもって深掘りしようとしてきたのか（**高校時代の学習履歴**）、②大学で何をどう勉強したいのか（**大学での学修計画**）、③思いを突き動かす熱量をどれだけ蓄えられてきたか（**体験や経験を学びに変える意欲**）を大切にしてほしい。

受験勉強は大事だ。だが問題を解くことは 2 番目に大事なことにすぎない。1 番大事なことは、自分で問題を立てること、疑問を湧かせることだ。

日頃の授業や活動から「なぜ・どうして」を大事にしよう。武高生にはそれが求められている。

今年度、新たに本校の校長として着任しました下村昌弘です。

武雄高校への赴任は2度目で、前回は平成10年を中心とした前後の7年間、統合前の武雄高等学校に勤務しました。その折にも、たくさんの優秀な生徒さんと先生方に恵まれ、30 代の教員として最も充実した時間でした。

今回も、素晴らしい資質・能力をもった生徒さんたちに囲まれ、大変うれしく思っています。皆さん一人ひとりにしっかりと寄り添いながら、たくさんの情熱あふれる先生方と一緒に、私自身の教員生活の総決算のつもりで頑張ります。

さて、皆さん、武雄高校の良さは何でしょう。

私は、この学校には毅然・凛然として外見を着飾ることなく内面を磨く校風があり、そこに学ぶ者には、端正・清楚にして品格・品性がある、また、知に裏打ちされた勇を備えた気概があるという点だと思います。皆さんもぜひそういう校風や気質を大事に継承してください。

私は、皆さんに高校生活において自分の興味・関心を深掘りすることを愉しんでほしいと思っています。

教科・科目など学問的な分野でもいいし、SDGs や街づくりなど現代的な課題でもいい、あるいは自分が今熱中しているスポーツや芸術・文化活動でもいい、とにかく自分が一番自分らしいと思える分野について、広く調べ、深く考えてほしいのです。

そこから「問い」が生まれます。そうした「問い」を生み出す力こそ、これから不確実性の高い時代を生きる原動力になるのです。

皆さん TAKE OFF の時に備え、武雄高校で力を蓄えましょう！ ともに頑張りましょう！

これから、ＨＰや本通信を通じて情報発信をしていきます。どうぞよろしくお願いします。

https://www.education.saga.jp/hp/takeokoukou/